

学 位 論 文 要 旨

氏 名 一ノ瀬 里紗

題 目 創造的な話し合いを実現させるための学習指導に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究の目的は、小学校中学年以上の段階において、創造的な話し合いを実現させるためには、どのような学習指導を行えばよいのかを明らかにすることである。

第1章において、創造的な話し合いとはどのようなものなのか、コミュニケーションと思考という枠組みで検討した。コミュニケーションの起点は大きくことであり、能動的な活動・創造的な活動であることが示された。大きくことが思考活動と密接に関わっていた。創造的な話し合いは、自己との対話、他者との対話、テキストとの対話の大きく三つを行き来しながら互いの思いや考えを積み重ねていく創造的な活動であり、自分の考えを構築し互いの理解を深め、異質な他者との出会いを契機として自己を形成していく過程が重要となることが明らかになった。

第2章において、先行研究を分析した結果、話し合う力を高めるためには、大きく分けて四つの要素が必要であることが明らかになった。話し合いの仕方や進め方、役割の理解など話し合いに関する知識や技能、その知識や技能を下支えし話し合いの内容を深め展開していくための思考力。そして、主体的に話し合いに向かう態度である。さらに、三つの要素に関する学びを学習者が自覚化するための要素としてメタ認知のはたらきが重要となることが導き出された。

その過程で、話し合いの内容を深め展開していくための思考力については、論理的思考力の獲得に課題があることが明らかになった。創造的な話し合いを実現させるためには、話し合いの内容を深め展開していくための思考力をどのように獲得させ、それを向上させていくかを検討する必要がある。メタ認知のはたらきに関しては、学習指導過程において自分たちの話し合いを対象化するためのメタ認知的活動を効果的に位置づけることで、学習者が話し合いに関する様々なメタ認知的知識を方法知として獲得できることが認められた。

このように、話し合う力を高めるためには、話し合いの仕方や進め方、役割の理解など話し合いに関する知識や技能、話し合いの内容を深め展開していくための思考力、主体的に話し合いに向かう態度、メタ認知のはたらきの四つの要素を効果的に高めることが重要である。これら四つの要素は独立したものではなく、互いに関連し合いながら相互作用をもたらし高まっていくものであり、小学校低、中、高学年へと段階を追って高まっていくこと検証された。特に、話し合いの仕方や進め方に関する知識や技能の獲得と、話し合いの内容を深め展開していくための思考力の育成、この二つをどう解決していくかが肝要である。話し合い学習だけでも解決していくことはできるが、思考活動の経験を増やし音声言語の即時性に対応できるようにするためには、説明的文章の学習との関連を視野に入れた学習指導のあり方を検討することが課題となった。そこで、対話性と論理性の向上という視点で説明的文章学習の借り方を検討した結果、批判的思考や創造的思考をはたかせながら、筆者の考えや意図を推論したりする批判的読みの学習を関連させればよいことが示唆された。

第3章では、先行研究の検討の分析をもとに、小学校中学年段階の「創造的な話し合いを実現させるための学習指導の構造図（試案）」を仮説的な枠組みとして提示した。第4章では、仮説的な枠組みとして第3章で示した構造図を基に、論者の授業実践を分析し、その有効性を検証した。その結果、年間指導のあり方については、話し合いの様相が変化する過渡期である中学年段階において、役割の理解を通して話し合いを対象化し、目的に応じた話し合いの進め方を学ぶ学習経験を積み重ねていけるような年間指導が効果的であることが明らかになった。関連学習のあり方については次の二つが明らかになった。一つ目は、説明的文章学習では小学校段階であっても、内容の読み取りだけに留まらず、筆者の推論のあり方を理解したり、読者の立場での推論をはたかせたりすることを意図した学習を設定することである。二つ目は、二領域のそれぞれの授業において推論という同じ思考をはたかせた学習や話し合い過程を経験させることで思考活動の経験を増やすことである。これらの点に留意して二領域の学習を関連させることで、互いの考えやその意図を推論することを促進させ、話し合い時のよりよい文脈の形成につながり、話し合いをより自律的で組織的なものへと発展させることになる。これにより、学習者の話し合いを創造的な話し合いへと向かわせることができる。

創造的な話し合いを実現させるために、反復的・段階的な話し合いの年間学習と筆者の考えや意図を推論する説明的文章での批判的読みの学習を関連させることで、学習者の推論する力が高まり、話し合う力を高めるために必要な要素の獲得を促進させていくことが明らかになった。しかし、本研究では両者を関連させた学習指導の構造図を示し、年間計画の一例を示した段階である。実践を通しての検証も十分には行っていない。研究の対象も小学校中学年段階が中心であり、その前後の段階での学習指導のあり方にまでは迫ることができていない。今後はこれらの課題をふまえ、創造的な話し合い活動を実現するための学習指導についてさらに研究を進めていく。